

はしがき : CLS収束に際し

著者名(日)	長谷川 信子
雑誌名	Scientific approaches to language
巻	11
ページ	iii-xii
発行年	2012-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000687/

神田外語大学言語科学研究センター（CLS）の紀要 *Scientific Approaches to Language* (SAL) 第 11 号をお届けします。1 年前に、「SAL は、CLS 発足の初年度（2001 年度）に第 1 号を刊行しました。それから、10 年、無事に第 10 号を刊行できること、大変嬉しく思います」と「はしがき」に書いたばかりなのですが、ひとつ、残念なお知らせがあります。CLS は、その発足から 11 年を経ました今年度（2012 年 3 月）をもって、（以下で触れますが）新たな組織に生まれ変わることになり、本紀要 SAL も、今号をもって「期間限定のない」休刊となることになりました。長い間、ご購入下さりありがとうございました。

SAL は、お陰様で、小さな研究所の紀要としては、（手前味噌ですが）比較的評判もよく、国内外の学会や学術誌に収録論文が引用されているのを目にすることも多々あり、そうしたことが励みになり、毎号 200 頁（時には、本号のように 300 頁）を越える論文集としてお手元にお送りしてきました。執筆者のほとんどは、本学教員、本学大学院修了生（同時に CLS 非常勤研究員）、本学大学院生、CLS で支援する公的資金による研究プロジェクトの研究者ですので、SAL を通して、本学（特に大学院）における言語学・言語教育関係の研究内容と成果が発信されてきたことになります。また、本学を修了し、他大学の教員として活躍している「本学の元大学院生」も、本紀要へ寄稿することで、改めて本学で受けた教育と研究からの自らの成長を確認する機会としてくれていたようです。そして何より、SAL を毎年受け取られ、論文に目を通して下さる方々がいらっしゃるものが、ほぼ毎年寄稿することを心がけていた、センター長の私、顧問の井上和子先生はじめ、大学院教員、CLS 所属の研究員、非常勤研究員の論文執

筆への大きなインセンティブでした。この場を借りて、お礼申し上げます。

本号は、(取りあえずの)「最終号」となることから、多くの寄稿が寄せられ、言語学関係で 10 編、言語教育関係で 6 編と、収録論文数、総ページ数ともに、これまでで最も「多数」で「厚い」ものとなりました。また、そのバリエーションも豊富で、<言語編>では、理論研究、記述研究、言語エッセイ、扱う現象も、文構造、意味と統語の接点、語形成、日中対照、方言など、<言語教育編>では、理論と実証、実践の観点から、児童英語、日本語教育、学習者の言語知識、タスク教育、プログラム評価など、多岐にわたり、CLS が支援する言語研究の幅と裾野の広さを示すことができたものとなりました。「最終号」として誇れる内容のものとなったと自負しております。ご高覧いただければ幸いです。

以下では、CLS 活動全般を振り返り、最後に CLS 後の「新組織」について記させていただきます。

CLS は大学院(言語科学研究科)に附置された研究組織で、その設置目的は、その前身の COE 研究の課題(言語理論の構築と多角的な実証)の追求を引き継ぐと同時に「大学院における研究と教育に資する」ことで、大きく分けて、以下の 3 つを中心に活動してきました。

- (A) 大学院教員・CLS 研究員の科研費などの「公的外部研究費」の獲得、遂行、運用支援。
- (B) 「言語科学」研究、および(A)と関わり、広く、言語学と言語教育学の研究教育の基盤形成と発展に資する「研究会(コロキウム)」「講演会」「ワークショップ」「シンポジウム」などの開催、および、そうした成果の公表を]含めた紀要(SAL)の刊行とホームページの整備。

(C) 大学院生、修了生、CLS 研究員への教育と研究支援。

(A)については、CLS では、以下の公的資金による研究プロジェクト [総額(直接+間接経費) 116,000 千円余り(予定を含む)] を支援して参りました。大学院専任教員は6名(現在は5名)、CLS 専任研究員は1名と限られた中では、常に数本のプロジェクトが進行しており、(A)の活動はCLSの活気の源であり、その研究レベルの高揚・維持に大きな役割を果たしてきました。資金獲得にご尽力下さり、質の高い研究を継続的に追求して下さった先生方に御礼申し上げますと共に、今後の更なるご活躍、ご健闘をお祈り致します。

日本学術振興会 科学研究費補助金

- ◆2002年4月～2005年3月、基盤研究(B)『テキスト理解と学習—テキストの言語の特徴が理解と記憶に与える効果について—』(課題番号:14380119)(研究代表者:堀場裕紀江;研究分担者:長谷川信子、井上和子、小林美代子)[総額10,900千円]
- ◆2003年4月～2006年3月、基盤研究(C)『静岡県下「言語の島」における言語変容に関する基礎的研究』(課題番号:15520293)(研究代表者:木川行央)[総額3,300千円]
- ◆2004年4月～2007年3月、基盤研究(B)『早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究』(課題番号:16320075)(研究代表者:小林美代子;研究分担者:長谷川信子、堀場裕紀江、田中真紀子、原岡笙子)[総額13,400千円]
- ◆2007年4月～2010年3月、基盤研究(B)『文の語用的機能と統語論:日本語の主文現象からの提言』(課題番号:19320063)(研究代表者:長谷川信子;研究分担者(2008年4月より):遠藤喜雄)[総額10,400千円]

- ◆2007年4月～2010年3月(2009年10月より熊本大学へ移管)、
基盤研究(B)『早期英語教育指導者の養成と研修に関する
総合的研究』(課題番号:19320085)(研究代表者:小林
美代子;研究分担者:宮本弦、田中真紀子、長谷川信子、
堀場裕紀江)[総額14,277千円(本学での執行分)]
- ◆2008年4月～2011年3月、基盤研究(C)『早期英語教育
教材に見る語彙と文法の特徴:真に「英語が使える日本人」
育成に向けて』(課題番号:20520552)(研究代表者:神
谷昇;研究分担者:長谷川信子、小林美代子)[総額3,640
千円]
- ◆2008年4月～2012年3月、基盤研究(B)『語彙とテクス
ト理解:読解に関わる語彙知識の多面性と語彙の意味につ
いて』(課題番号:20320073)(研究代表者:堀場裕紀江;
研究分担者:岩本遠億、木川行央)[総額19,370千円]
- ◆2009年4月～2012年3月、基盤研究(B)『談話のカー
トグラフィー研究:主文現象と複文現象の統合を目指して』
(課題番号:21320079)(研究代表者:遠藤喜雄;研究分
担者:長谷川信子)[総額9,880千円]
- ◆2009年4月～2012年3月、基盤研究(C)『首都圏方言の
実態に関する基礎的研究』(課題番号:21520478)(研
究代表者:木川行央;研究分担者:久野マリ子)[総額4,290
千円]
- ◆2011年4月～2014年3月、基盤研究(B)『述語の意味と
叙述タイプに関する統語論からの考察:機能範疇統語論の
構築を目指して』(課題番号:2332089)(研究代表者:長
谷川信子)[総額5,590千円(予定)]

◆ (独) 科学技術振興機構 委託研究

2004年12月～2009年11月、研究領域:「脳科学と教育 タイ
プ(II)」研究課題:「言語の発達・脳の成長・言語教育に

関する統合的研究」(研究リーダー:萩原裕子(首都大学東京))
本学担当研究題目:『言語学・応用言語学に基づく、外国語能力の検査、判定、評価法の開発』(研究機関代表者:長谷川信子;研究分担者:井上和子、小林美代子、堀場裕紀江)[総額 21,420 千円(本学担当分)]

(B)については、SAL 毎号の巻末(および CLS ホームページ)に、研究会関係の情報を記載し、日時、講演者・発表者とタイトル、開催イベントの趣旨と要旨などをお知らせしてきました。ここでは、件数を述べるに止めますが、11 年間で、数も内容も大変実りの多いものとなりました。多くのイベントが、その時進行中の(A)の研究プロジェクトとの共催となっており、(A)の研究課題と CLS の活動がいかに相互に連携し、恩恵を与え合っていたかがお分かりいただけると思います。

- ◆ **コロキウム、研究会** (1, 2 名による講演・研究発表) 31 回
- ◆ **講演会、レクチャー、セミナー** (特定トピックでの専門家による講義など、教育的示唆を含むもの) 11 回
- ◆ **ワークショップ、フォーラム、シンポジウム** (テーマを絞り数人以上の講演者・発表者によるもの) 12 回

こうした研究会に加え、本紀要(年刊)の公刊、科研による報告書の公刊、ホームページでのイベントのお知らせや活動報告など、日常的に研究を支援して来ました。(B)の活動は「種蒔き」の役割を果たしますので、CLS としての活動は収束しますが、その影響の今後への波及・発展を信じております。

そして、(C)は、CLS 顧問の井上和子先生を囲んでの研究会(通称「井上ゼミ」)や科研の遂行に関わる少人数での集まり(「科研サロン」「XX(研究代表者の名字)科研会議」など様々な名称が用いられています)などが該当します。こうした活動は「形」としては残りにくいですが、大学院生や修了生、若手研究者にとっては、正規の授業や講義では学ぶことので

きない、しかし、研究者としてのキャリアの礎となるノウハウ（研究を遂行するとはどういうことか、どのように遂行の手順を踏むのか、など）を獲得し、意見交換、熟す前の考えを複数の人々と共有することの重要性などを感じてもらった貴重な場となりました。この「非公式」の活動が、若手の研究者の学会発表、博士論文執筆、学術論文などへと結実する肥料になっているに違いありません。今後も更に大きな花や実へと飛躍してくれることを期待しています。

最後に、CLS 後との関わりで、未だ不確定な部分も多いですが、（希望的観測も含め）少し書かせていただきます。

CLS は、井上和子先生（現 CLS 顧問、当時は学長）が研究リーダーとして率いて下さった、1996 年～2001 年の 5 年間にわたる理論言語学を基盤とした COE プロジェクトを受けて発足しました。しかし、言語教育はじめ人文教育に圧倒的な強みを発揮する神田外語大学に附置した研究機関としては、言語学が 21 世紀に入って先鋭的に分け入り、今世紀最も注目を浴びる研究分野として発展を続けている「脳科学」「生物言語学」「人工知能」といった学際的な研究を追求することには、限界がありました。むしろ、本大学院の教育・研究と深く関わる、人文学的な個別言語研究、対照言語研究からの言語記述研究と言語理論研究、および、言語教育学研究に的を絞った研究所として活動することを主眼としてきたのです。11 年間の SAL の目次を振り返っていただくと分かりますが、また、上記の公的資金による研究課題からも明らかですが、言語教育学関係の活動が年々増えてきています。特に、今世紀初頭に小学校への英語の導入が具体的に検討され始め、日本における言語教育が「文法・訳読、知識獲得教育」から、学習者が「コミュニケーション」で「使う」ことを可能にする「タスク中心」教育へとシフトする中で、国際的にも、EU 圏での言語教育の指針としての CEFR（欧州共通言語参照枠）

が整備され、国内的にもそれに言及した「言語能力」判定が英語教育だけでなく日本語教育を含めた他言語教育にも影響を及ぼしはじめ、また、研究領域や手法も、学習理論や認知心理学、統計学の知見と手法、コーパス・大型データベースの成果などを取り込み、言語教育研究環境は急速に変化・発展してきています。CLSの研究活動でもそれが反映されてきました。

そうした言語教育分野の「変化・発展・隆盛」に比べると、言語理論研究（特に、人文学的な見地からの理論研究）分野は、70年代～90年代後半での「圧倒的な勢い」から、よく言えば「成熟した地道な研究」として、厳しい言い方をすれば「分野の動向を左右する画期的進展が限られた」まま進行してきています。それでも、CLSでは、上記で言及した研究会・講演会・ワークショップなどを国内外の研究者を招聘して定期的を開催し、昨年度のCLS10周年記念のイベントは、昨年11月に論文集『70年代生成文法再認識—日本語研究の地平』（長谷川信子（編）、開拓社出版）として公刊するなど、COEに匹敵する研究実績をめざし日々活動して参りました。

神田外語大学は、特に、学部教育においては、学習者のニーズに応えられるコミュニカティブ・アプローチをいち早く取り入れ、学内でNative教員と日常的に英語（および、中国語、韓国語、タイ語他の外国語）に触れる環境（ELI、MULC）を整え、学習者の自主学習をサポートする自主学習センター（SALC）を設置し、語学の授業も複数教員が連携したコンテンツ中心に改編するなど、先導的・画期的な言語教育（特に、英語教育）を実施していることで、国内外に広く認知されています。来年度は、本学は開学25周年にあたり、過去四半世紀の言語教育を振り返り、今後の四半世紀に向け、新たな一歩を踏み出す年度となります。

CLSの研究組織は、そうした全学的な教育研究の流れの中

で、改編されることとなります。名称も「外国語能力開発センター (Center for Foreign Language Proficiency (FLP))」と変更され、これまでは大学院に附置し、大学院の研究と教育の支援が第一義的な目的でしたが、来年度からは、大学自体に附置され、学部教育も含めた（むしろ学部教育への還元が期待される）研究所として再出発いたします。外国語能力は、母語能力の上に成り立ちますから、その判定と開発に関わる研究には、広く「ヒトの言語能力」「母語と目標言語との体系的な相違」の把握が不可欠ですので、COE・CLSで培った言語学の知見が生かされる研究組織となります。また、上述したように COE 以降積み重ねてきた言語教育研究に関わる知見や動向の把握が、今後の日本における言語教育のあり方を考察する上で重要な指針を与えてくれると思われまます。来年度は初年度ですので、研究組織は、まだ小規模で「手探り」での船出となりますが、センター長には長谷川があたり、専任教員として、2011年9月から CLS 研究員を勤めている藤巻一真さん（本学大学院 2009 年博士号）が着任し、学内の多くの先生方の協力を仰ぎながら、他の研究教育組織と連携しつつ、研究活動を推進して行くことになりました。当座は、CLS では中心に据えてきた上記(A)～(C)の活動は限られますが、長谷川の理論言語学系の科研も継続中ですし、大学院では独自に研究会や講演会の活動を COE 以前に戻り再開させつつありますので、新組織が立ち上がることで、COE・CLS で培った研究の土壌は、大学全体を舞台にさらに生産性の高い発展へと繋がると信じております。本紀要は「休刊」となりますが、ゆくゆくは新組織の活動もご覧いただける形を考えて参ります。

CLS のホームページは、今後も接続可能な形で残しますので、紀要・報告書の送付申し込みや搭載されている情報などへのアクセスはこれまで通り可能です。必要に応じて、新組

織で対応を続けます。また、新組織のホームページも遠からず立ち上げる所存ですので、ご興味がありましたら、5月以降にでも（CLSのWebページにリンクを張りますので）訪れていただければと思います。

11年間（COEプロジェクトを含めれば16年間）継続してきた組織を曲がりなりにも「収束」させるのは、多くの方のご尽力とご協力を得て活動して参りましたので、現時点では、後ろ髪が引かれる思いが強いですが、CLSからの発展として研究を継続する機関として再生されますので、「終わり」は「新たな始まり」でもあります。私共も期待したいと思いますが、皆さまにもご期待いただきたいと思います。

CLS収束にあたり、研究員の神谷昇さんには特別に感謝の意を表したいと思います。6年間研究員をお願いしましたが、その間、小学校英語関係で科研（基盤研究(C)）を研究代表者として率いて下さり、CLSの児童英語関係の研究（SALにも数本の論文が記載）の大きな部分を担っていただきました。その研究の合間を縫って、他の教員の研究やCLSでのイベント開催、「井上ゼミ」の運営、2009年6月に本学で開催された第138回日本言語学会での尽力、そして何より、SALの毎号の編集作業、神谷さんがいなかったなら、CLSの活動はこれほど大きな成果には繋がりませんでした。神谷さんの任期終了がCLS最終年度と重なり、年度末には大変多忙になってしまいました。本当にありがとうございました。今後の新天地での活躍を祈念しています。

CLSには非常勤研究員、研究協力者として日常的にCLSの活動を支えて下さっていた方がいます。ここ数年は、神谷科研とその延長で、町田なほみさん、長谷部郁子さん、には大変お世話になりました。定期的にCLSで研究作業をして下さることで、CLSの活気が増し、院生の研究補助など様々な場面で助けていただきました。お礼申し上げます。

そして、事務補佐員の角田雪絵さん。CLS の発足当初から科研の執行、ホームページの改訂など、常駐して CLS 全体の業務を把握してくださっていた前任者（椎名千香子さん）が、昨年度で退職されました。角田さんは、その後を受け、同様の業務を短期間で把握し、今年度末には、複数の科研が最終年度を迎え、同時に、CLS 収束の作業が加わり、大変多忙で気持ちの休まらない「1年目」となってしまいました。一つ一つ確実に処理して下さる着実さ、大変頼りになります。ありがとうございました。そして、新組織でも事務を担当していただけるとのこと、新たに加わる仕事もあるかと思いますが、今年度同様、よろしくお願いいたします。

最後に、井上和子先生。先生が CLS の顧問として背後に控えて下さっていたことが、CLS とその活動の求心力でした。先生のどこまでもお優しい慈愛に満ちた包容力と、とことん学生・若い研究者の考えを聞いて下さる忍耐力、そして、どんなこと・人にも「良い点」「優れた面」を見つけて励まして下さる「ポジティブさ」、そうしたことが、本学の博士号の大きな牽引力となり、私はじめ、教員の研究の背後にありました。新組織に衣替えしても、井上先生の教え、スピリット生き続けます。そして、「井上ゼミ」は新組織でも支援を続けます。ですので、「感謝」は一応の一区切りに過ぎません。今後ともよろしくご指導下さいませ。

最後の最後になりますが、大学院には、その教育と研究を支える重要な片輪のつもりで活動して参りましたので格別な思いがあります。今後は、新組織と大学院、両者が切磋琢磨してさらに発展できること、祈念しております。

2012年3月

言語科学研究センター・センター長
長谷川 信子